

# OG 紹介



山田真理子さん  
(平成十六年度入学)  
広島大学 広報グループ

## ○仕事内容

私の所属する広報グループは、広島大学全体の広報の窓口として様々な業務を担っています。例えば大学のホームページや大学案内などの刊行物を通じ、学生や大学、教職員の動きを広く学内外に発信しています。また、中学生や高校生などのキャンパス訪問のお世話や、国内外からの問い合わせへの対応など、業務内容は幅広く、新しいことにも取り組んでいます。その中には大学公式の

Facebook & Twitter もあります。

その中でも、私は HU-style という学生向けの広報誌を担当しています。HU-style のスタッフは広大生なのですが、毎号皆で会議をして企画を決めていきます。学生の取材への同行や、学生からあがってきた原稿のチェックなども行っています。

## ○この仕事を選んだ理由や経緯

就職活動では、中国・四国地区国立大学法人等 職員採用試験という大学職員になるための試験を受けつつ、民間企業の採用試験も受けていました。実は、就活の時期になって、「この業種でこれがしたい！」という明確な夢がありませんでした。ただ、漠然と「人の役に立ちたい」という思いはありました。

最終的に、どの道を選べばいいのか、どの環境において一番自分らしく生きることができるのかを考えたときに、大学職員の仕事は、学生や教員、地域の方の役に立てる、と自然にイメージできたので、母校で働くことを選びました。面接や職場訪問で出会った職員の方達の雰囲気良さも、決め手になりました

ね。

## ○仕事のやりがいや魅力

今年の四月に広報グループに配属になり、今の部署では HU-style 七月号が初めての大きな仕事になりました。これまでの配属先では今ほど学生と接する機会がありませんでした。締め切り前などは大変なときもありましたが、学生と一緒に話し合いや取材をし、なにかを創ることにとてもやりがいを感じます。また、さまざまな挑戦をしているスタッフや、取材で出会う学生の話を聞くたびに、自分も頑張らなければ、と元氣と刺激をもらっています。

## ○総合科学部への進学理由

就職活動同様、受験の際にも自分がなにを学びたいのかが分かかっていませんでした。そんなときに、文理両方の分野が学べ、多角的な視点が育つ、という総科のパンフレットを見つけました。オープンキャンパスに参加し、本当に多様なプログラムがあることを知りました。入学後に数あるプログラムの中から

自分のやりたいことを選べるというのも魅力でした。また、大学では学部により専門を限定するのではなく、何でも勉強したいと考えたことも総科の受験を決めた理由です。

### ○アメリカへの留学

大学三年の後期から四年の前期にかけて HUSA プログラム (USAC) で、ネバダ大学リノ校へ留学をしました。最初は大学のキャンパスにある語学学校で学び、後半から学部や大学院の国際関係の授業も受講しました。現地の学生に負けまいと深夜まで図書館で勉強し、成績で ▶ がとれた時は本当にうれしく、自分への自信にもつながりました。

### ○留学したきっかけ

私の地元山口県岩国市には米軍基地があり、身近なところに、アメリカ人家族の方達の通訳やサポートをしている人がいました。幼い頃からそうした光景を見ていたので、英語は全く話せなかったものの、「外国語は受験科目ではなくコミュニケーションのツ

ル」という意識が自然とありました。また、英語を使っていろいろな国の人と話ができたらいいな、とも思っていました。大学に入学し、サークル漬けの毎日の中、今しかできないことはなにか考えた時に自然と、留学を意識し始めました。5人の子供を育て大変な中、いつも私のやりたいことを応援してくれた両親には今でもとても感謝しています。

### ○アメリカで働いた体験について

この四月まで、文部科学省の実施する研修に参加し、一年間アメリカで暮らしていました。この研修は、日本の大学の国際化を促進するため、大学職員に国内外で国際的な業務や経験を積ませるもので、文部科学省にある大学の国際化を促進する部署で一年間勤務を行った後、渡米しました。最初の三カ月はワシントンDCでアメリカの高等教育行政について学ぶとともに、政府、教育関係の政府機関やその他の団体を訪問しました。その後九ヶ月、オクラホマ州にあるタルサ大学という小さな私立大学の国際オフィスで勤務しました。

学生時代の留学のおかげで、多少英語が理解できるものの、特にオクラホマ州や自分のいた町はアジア人も少なく(初めて日本人をみた、と珍しがられることも…)、ネイティブ同様のスピードで話され、最初は苦労しました。南部は外国人に保守的、と一般的にいわれますが、職場の同僚や町の人は本当に親切で、家族のように接してくれました。

### ○大学時代の専攻や研究内容

実社会で起きている問題に興味があったので、当時の環境共生科学プログラムで、国際法や国際関係、社会問題を中心に学びました。ただ、三年後期と四年前期に留学をしたため、帰国後に専門や所属のゼミというものがありませんでした。帰国後すぐに卒論の執筆になったため、最初は何を書こうか悩みました。海外にいたこともあり、日本における外国人の問題に興味を持っていました。そこで、広島自動車関連企業等で働く日系ブラジル人の出稼ぎ労働者の子供たちの教育や心理的な問題に目を向け、日本の外国人政策やその問題点を取り上げることになりました。

## ○大学時代の部活やサークル

Fineshotというテニスサークルで、本当に朝から晩までテニスをしていました。卒業してもいまだに集まる仲間達は、大学で得た一生の財産です。サークルでは年二回ある合宿の企画を担当していたのですが、百人以上の団体の合宿は、宿探しから企画準備まで本当に大変でした。大きなことを、仲間と協力し、成功させる、ということが初めての経験だったので、合宿係の仕事を通じ、「ものをつくる」という新たな楽しみをみつけることができました。

## ○大学で学んだことや培った能力が社会でどう生かされるか

大学を卒業した次の日から大学で働きはじめたので、大学や学生生活についてある程度知っており、分らないことだらけ、ではありませんでした。(今は、働けば働くほど、こんなにも他の学部や研究について知らなかったのかと思いきらされるのですが…) 最初は留学担当の部署に配属になり、私は広大生の留学を担当していたため、学生にア

ドバイスをする上で自分の留学経験がとても役に立ちました。

また、卒論を書く中で得たことがあります。最初はインターネットや本から得た情報をもとに、自分なりの考えをまとめていたのですが、指導教員の佐々木浩先生から、「人の意見を鵜呑みにするのではなく、自分の目で問題をとらえ、人と直接話をしてこそ、「自分の」意見が生まれ、卒論が書ける」と教えられました。社会学で扱う複雑な問題は、取材相手に歓迎されず調査が一筋縄でいかないこともあり、解決策も簡単にはできません。それでも自分で足を運ぶことの大切さを教わり、現場にいつて、厳しい現実を知り、率直な話を聞いたことで、多くのことを学びました。「受け身にならず、自ら情報を集め、そこから企画・提案をする」という社会人に必要なスキルの一歩目は、大学で学ぶ姿勢の中から磨かれる、と今改めて感じています。

## ○将来の目標

大学の中には研究支援、学生支援、地域貢献など、学生の皆さんが知らないような幅広

い業務があります。私はまだまだ大学職員として未熟で経験が少ないので、今後も幅広い業務を経験したいです。また、学生が広大の事を好きになり、広大来て良かったなど思ってもらえるよう、母校がますます良い大学になるよう、自ら提案をし、実行に移せる職員になりたいと思っています。

## ○人生に影響を与えた人や言葉

文科省で働き始めた当初、自分の意見を述べたり、議論をする際、無意識に「広島大学」が自分の基準になっていました。そんなとき、上司から「広島大学さえよければいいのか。何のために働いているのか。日本や世界の教育、未来の子供のために働こうとしないと、大学職員としての成長はそこまでだ。もっと広い世界を見ろ。」と言われました。「日本の大学は広大だけではない。大学に進学しない人もたくさんいる。日本のように教育制度が整っていない国もある。日本の若者達が、世界の人と協力しなければ日本自体の将来も危うくなる中、広大のために仕事をしていくのか。」と聞かれたときに、自分が何のため

に働いているのか、働きたいのか初めて考えましたね。もちろん広大の学生や地域のために働くことには変わりありません。しかし今は、自分の仕事の先にあるのは、社会や世界、未来の子供達なのだ、と広い視野でものごとを考えるようになりました。

#### ○総科生へ一言

まず…飛翔はもちろん、学生スタッフが一生懸命作っているHU-styleを読んでください！(Webでも読めます。そしてスタッフを募集中です！笑)総科のメリットは、カリキュラムも柔軟で色々な勉強ができるということにあると思います。今自分のしたいことが決まっているのであれば、ひたすら突き進むのもよいと思います。一方で、今なにをしたいのかわからない時期、というのもチャンスです。あせらず、思い詰めず、短期の留学に挑戦したり、職員や先生方と話をしたり、学内外であるイベントに参加してもよいと思います。私は総科のスタジアンを着て、経済学部、法学部、教育学部の講義に乗り込んでいていました(笑)

広報グループで働いていて、毎日新しい驚きがあるほど、広大生や広大はいろいろな挑戦をしています。どこか遠くへ行かなくても、お金を払わなくても、人の話を聞き、新しいことに挑戦し、仲間を見つけるチャンスはたくさんあります。もみじや広大のホームページなど情報網を使って、今しかできないことに積極的に挑戦してください。

【担当】 25生 上江洲 まどか

25生 小林 美月